

第34回豊橋市小中高特連携教育推進協議会議事要録

令和6年1月29日 開催

豊橋市教育委員会

<b>第 34 回 豊橋市小中高特連携教育推進協議会</b>	
<b>日時</b>	令和 6 年 1 月 29 日 (水) 午前 9 時 30 分～午前 11 時 30 分
<b>場所</b>	豊橋市役所 東 85 会議室
<b>出席者 敬称略</b>	<p>教育長 山西正泰</p> <p>教育委員 西島豊 内浦有美 中島美奈子</p> <p>高等学校等校長 寺田安孝 (時習館)、鈴木敏夫 (豊橋東)、丸崎恵子 (豊丘)、 有賀洋之 (豊橋南)、藤城義光 (豊橋西)、高木永幸 (豊橋工科)、 間瀬泰宏 (豊橋商業)、本多芳隆 (豊橋高)、衛藤真有 (豊橋豊)、 彦坂充俊 (豊橋特別支援)、山田淳子 (くすのき特別支援)、 満田康一 (桜丘中)、横山貴美 (桜丘高)、高倉嘉男 (豊橋中央高校)</p> <p>小中校長会 宮林秀和 (青陵中)、梅原康史 (東部中)、小松正人 (栄小)、 鈴木宏卓 (五並中)</p> <p>事務局指定委員 種井直樹 (教育部長)</p> <p>※欠席者 渡辺嘉郎教育委員、大塚雅史 (福岡小)、山崎宏人 (藤ノ花女子)</p>
<b>オブザー バー</b>	<p>小林和弘 (東三河教育事務所 指導課長) 森卓也 (東三河教育事務所 主査)</p> <p>小田敦子 (豊川市教育委員会 指導主事)</p> <p>戸田由美子 (新城市教育委員会 指導主事)</p> <p>峠尚良 (田原市教育委員会 学校教育課長)</p>
<b>事務局</b>	浅倉淳志 (教育政策課長) 鈴木秀典 (学校教育課長) 他 4 名
<b>内容</b>	<p>1 協議事項 各分科会の今年度の活動状況と次年度の活動について</p> <p>2 報告事項 東三河小中高特連携教育推進協議会について</p> <p>3 連絡事項 第 35 回豊橋市小中高特連携教育推進協議会について</p>

## 議事録

### 開会

■西島会長 開会を宣言し、欠席委員、オブザーバーを紹介

#### 1 協議事項

各分科会の今年度の活動状況と次年度の活動について

##### (1) 英語教育分科会

■鈴木委員長 活動について資料説明

(西島会長)

来年度に向けて、小学校、中学校、高等学校の多くの先生がたに授業研究会へ参加していただくようにしたいと報告がありましたが、何か具体的な案はございますか。

(鈴木委員長)

コロナ禍で英語研究部員同士のつながりが切れてしまった部分があります。そこで研究部長中心に、まず小学校は小学校の研究部、中学校は中学校の研究部といった横のつながりを密にし、意識を高めながらの活動を考えています。小学校では夏休みに小学校の英語にかかわる教員が集まりそれぞれ研修会を開きました。また冬に小中学校合同で開催した研究部研究大会では、豊橋地区でわかれている12のブロックごとに英語の教員が集まり、お互いに情報交換をしながら、まずはつながりを深め、お互いに支え合いながら授業研究会に参加できる体制を作っていました。

今後は、コロナ禍で分散された活動を再開しながら、人間関係づくりを強化していきたいと考えています。

(西島会長)

ぜひ、コロナ禍を超えて新しい形で連携と推進ができるとよいと思います。

##### (2) 理科学教育分科会

■寺田委員長 活動について資料説明

(西島会長)

資料にある小中高での単元名をつないだ表がとても見やすいです。これは理科特有のものでしょうか。

(寺田委員長)

教育課程のスパイラルになります。小学校では簡単にふれていた学習内容を中学校、高等学校と段階的に進めていくなかで、より掘り下げて学んでいくことが必要です。

小学校で学んだことが中学校、高等学校でどのようにつながっていくのかを念頭におい

た学びをしていくことが我々のなかでとても大切であるからこそ、小中高特が連携する必要があると思います。

(西島会長)

小中高特連携協議会の推進の考えが根本からわかりました。ありがとうございました。

(3) 特別支援教育分科会

■山田委員長 活動について資料説明

(小松委員)

個別の教育支援計画について、特別支援学級の担任から「新しい様式は、いつ配付されるのでしょうか。なるべく早めに取りかかりたい。」との声がありました。できれば早い時期に様式などをいただいで、次年度の準備を始めたいと考えます。今後の見通しについて教えていただきたいです。

(山田委員長)

時期については、2月中旬にシステムに載せられるよう整理しています。

(丸崎委員)

豊橋市は個別の教育支援計画の引き継ぎについて、とても配慮されていると感じています。さらにバージョンアップするということで期待していますし、今まで以上に現場も助かると思います。

愛知県の特別支援教育連携協議会で、個別の教育支援計画について、小学校から中学校への引き継ぎはきちんとされているが、中学校から高等学校へ進学するところで途切れてしまいがちであることが課題になっていると話題が出ました。そのなかで豊橋市は数年前から中学校から高等学校へ進学する際、保護者のかたに確認していただいで了承が得られたものについては、生徒指導要録とともに高校への引き継ぎもしっかりできる体制をつくっていただき、とても助かっています。今後もより一層、高等学校との引き継ぎを大事することが続いていくとよいと思います。

(山田委員長)

中学校の先生がたにもしっかり書いていただいで、多くの保護者にわだかまりなく申し送りに賛同していただけるとよいと思っております。

(中島委員)

本当は幼保からの連携が大切だと感じていますが、小中高特の連携から踏み込んでいただいたことが大きな一歩だと思っています。保護者と寄り添って、その意識を「子どもは社会の子どもであり、自分の宝は社会の宝なんだ」そして、子ども自身が「自分自身は宝物だ」と思えるような連携が成し遂げていけるとよいです。

(山田委員長)

多大にお力添えいただきましてありがとうございました。

(西島会長)

私も園から高校までつながる「すくすくシート」が重要だと思います。

(山西教育長)

小中高特の連携を考えた人事交流で、豊橋からはくすのき特別支援学校へ毎年2名ずつ教員を派遣しています。3年間学び、一般校へ帰ってくると各学校の特別支援教育の中核となって活躍しています。逆に、もし特別支援学校から小中学校へ人事交流を実施した場合、学べることがあるのだろうかとか考え、山田校長先生にお聞きしました。山田校長先生から「特別支援は社会の中の特別支援です」という言葉が返ってきて、私の中にすごくおちました。ぜひ特別支援学校の先生がたにも交流として小中学校へ来ていただき、特別支援学級を担任していただくことで、全体の中での特別支援という見方ができるのではないかと思います。これはとても大事な視点だと思うので、今後はそういった人事交流ができるとよいと考えます。中学校と高等学校の交流が県の施策であることから新しい動きを入れ込んでいくことが小中高特の連携のあるべき姿だと思いますので、くすのき特別支援との人事交流を進めていきたいと思っています。

(山田委員長)

本校の職員も本校の中だけにとどまらず、この豊橋市の中にある学校という視点で、それぞれの立場で学んでほしいと考えますので、ぜひ小学校や中学校へ行かせていただきたいと思っています。自分たちの専門教科の勉強をしっかりと、今後は小中学校だけでなく高等学校へも人事交流ができる人材を育てていきたいと思っています。

#### (4) 言語能力分科会

##### ■古関指導主事 活動について資料説明

(寺田委員長)

言語活動は、高等学校での探究学習の重要な資質やスキルにつながっているので大切だと感じています。高等学校への接続も報告いただきましたが、小中学校で取り組んでいる言語活動の様子を高等学校の教員が理解したうえで、総合的な探究時間の指導が充実すると思います。そこへつながる支援として、分科会委員の先生がたから何か話題が出ましたでしょうか。教えていただきたいです。

(古関指導主事)

分科会では、高等学校の先生がたから国語のディベートについて話題にあがりました。小中学校から進学してきた子どもたちは自分の考えを伝えることはできますが、それを再構築して発信することがまだ難しい、話すこと、聞くことは小中学校でつけた力を高等学校でいかしていくことが大切である、今後は小中学校でしっかり力をつけていただき、高

等学校へ送っていただけるとありがたいという話があがりました。書くこと、読むことについてはまだ十分に話し合いが進んでいません。

(小松委員)

子どもたちの言語能力を上げていくため、今後は現場で我々が浸透させていかなければいけないと思います。この言語活動ブックの系統表に基づいて指導する際、例えば学級会では特活的な目標を考察できる、国語的な力を授けることもできるといった「一粒で二度おいしい」という言葉がありますが、まさにその言葉どおりの実践ができると思います。さらに現場での活用がいかされるよう、時々情宣をするなど、現場に刺激を与え続けていただければと思います。

(古関指導主事)

情宣は大事だと思いますし、作って終わるだけでは意味がないので、どのように活用を推進していくかを考えていきたいです。

## 2 報告事項

東三河小中高特連携教育推進協議会の活動について

### ■小林指導課長 活動について資料説明

(高倉委員)

「ほの国」未来セッションについて、ログイン画面に「東三河の公立高校について調べてみよう」と書かれています。私立高等学校へのリンクを貼っていただいていますので、「東三河の高校について調べてみよう」と変更していただければと思います。また、ログインして進んでいきますとインタビューが公開されていますが、公立の高等学校が中心となっていますので、私立の高等学校についても平等な機会を与えていただきたいです。

(小林指導課長)

今後検討し、報告いたします。

(西島会長)

全体を通してご意見があればお願いします。

(山西教育長)

小中学校と高等学校との交流についてお話しさせていただきます。専門性という視点で高等学校の教員は、小中学校の教員よりもレベルが高いと私も思っています。そのため、小中学校の教員は高等学校へ行き、教材研究を学びたいという思いがあります。しかし、子ども一人一人を捉え、その子たちを捉え続ける力は、小中学校の教員はとても高いです。一つの単元を起こし、子どもの意識で話し合い、かかわり合い活動を取り入れた授業づくりについては、小中学校の教員は大きな力をもっています。これから一つの授業を見に行

くだけでなく、一つの単元を考えていく際に、高等学校の先生がたにも入っていただくような形を取り入れることができると、探究型のイメージが膨らむと思います。

(寺田委員長)

児童生徒に教育の享受をしていくためのバックグラウンドとなる基礎基本の専門性は、小中学校の先生がたの力はとても高いと思います。今後も高等学校の教員は、教科指導における教科内容の専門性を高めていくことに努めていきますが、高等学校としても子ども理解を図ることに対して小中学校の実践を通じて身につけることはとても大きいことだと思っています。

例として、私が以前勤務した御津あおば高等学校と東陽中学校で行った中高の人事交流では、行った教員が行きっぱなしにならないようにしました。中学校と高等学校が連携し、中学校へ派遣された教員が高等学校へ戻って中学校の先生と一緒に授業を実践しました。また、高等学校へ派遣した教員が中学校へ戻って授業をするといったように、お互いが行き来しながら中学、高等学校の両方のスキルを積み上げるといった取り組みを行いました。この取り組みは今後、豊橋の小中高特連携教育の推進事業としても実践できるのではないかと考えます。時習館高等学校でも中高一貫教育が進んでいきますので、教育の範囲を拡充することが大事だと思います。地域の子どもは地域で育てることを何よりも大事にするなかで高等学校だけでは育てきれない面がありますので、設置者の違いを乗り越えて構築できればと思います。

(宮林委員)

小中高特の連携は今後も大事であると同時に、子どもたちの発達段階から逸脱することなく進めていく必要性を感じます。それぞれの発達段階において今、何を身につけなければいけないのかをしっかりと把握しながら、小学生の段階でここまで踏み込む必要があるのか、中学生がここまでのレベルが必要なのかなどを考えていくことが大切です。極めて困難なことまで求めず、できること必要なことをそれぞれの校種で発達段階を意識して研究していくことよよいと思います。

その一方で子どもたちの個々の能力差もあると思いますが、高等学校におかれましては、小学校、中学校で不十分だった点をもう一度学び直す機会を設けながら、子どもたちを社会に巣立たせていただいていることに、かねがね感謝しております。こういった場を通してお互いの理解が深まることで、より一層、小中高特が連携していくとよよいと思います。

(内浦委員)

1点目は言語能力分科会についてです。生成AIやチャットGPTなど、今後大きく動いてく過渡期のなかで、言語能力分科会にはIT関係の専門家のかたにもアドバイザーに入ってくださいことも必要かなと思います。子どもたちに学んでほしい、得てほしいという普遍的なものと、世の中がものすごい勢いで代わっていく情勢を受け入れる二軸のバランス感覚を大事にしながら進めていくことが、子どもたちの財産になっていくと考えます。

2点目は理科学教育分科会についてです。時習館高等学校の文化祭や豊橋技術科学大学の小中学校生向けのワークショップ、豊橋動物園での餌やり体験、視聴覚センターでのイ

ベント、東三河自然観察会など、豊橋市や東三河は理科学環境がとても整っていると思います。今後、もっと子どもたちにも周知できるような環境が整うとよいです。

(西島会長)

私もこの豊橋市の小中高特連携教育は地域特有の素晴らしいものだと思います。今後は産業や企業や生涯学習課などとも連携ができるとよいと考えます。

(中島委員)

乳幼児期の子どもたちがこのように小中高特と連携して育っていく環境を作っていただいている豊橋市、東三河は、子どもたちにとって幸せだと思います。個別最適な学び、協働的な学びは二分しているようですが、これを両立させていくことが豊かに生きていくための一つだと感じています。今後はぜひ乳幼児期の様子を高等学校の先生がたにも見ていただきたいです。健康、人間関係、環境、言語、表現の5領域の中で柔軟に育っていけるようなあり方ができるとよいと感じています。

### 3 連絡事項

第35回豊橋市小中高特連携教育推進協議会について

■浅倉教育政策課長 令和6年5月28日(火)で調整している旨を連絡

閉会

■西島会長 閉会を宣言し、終了